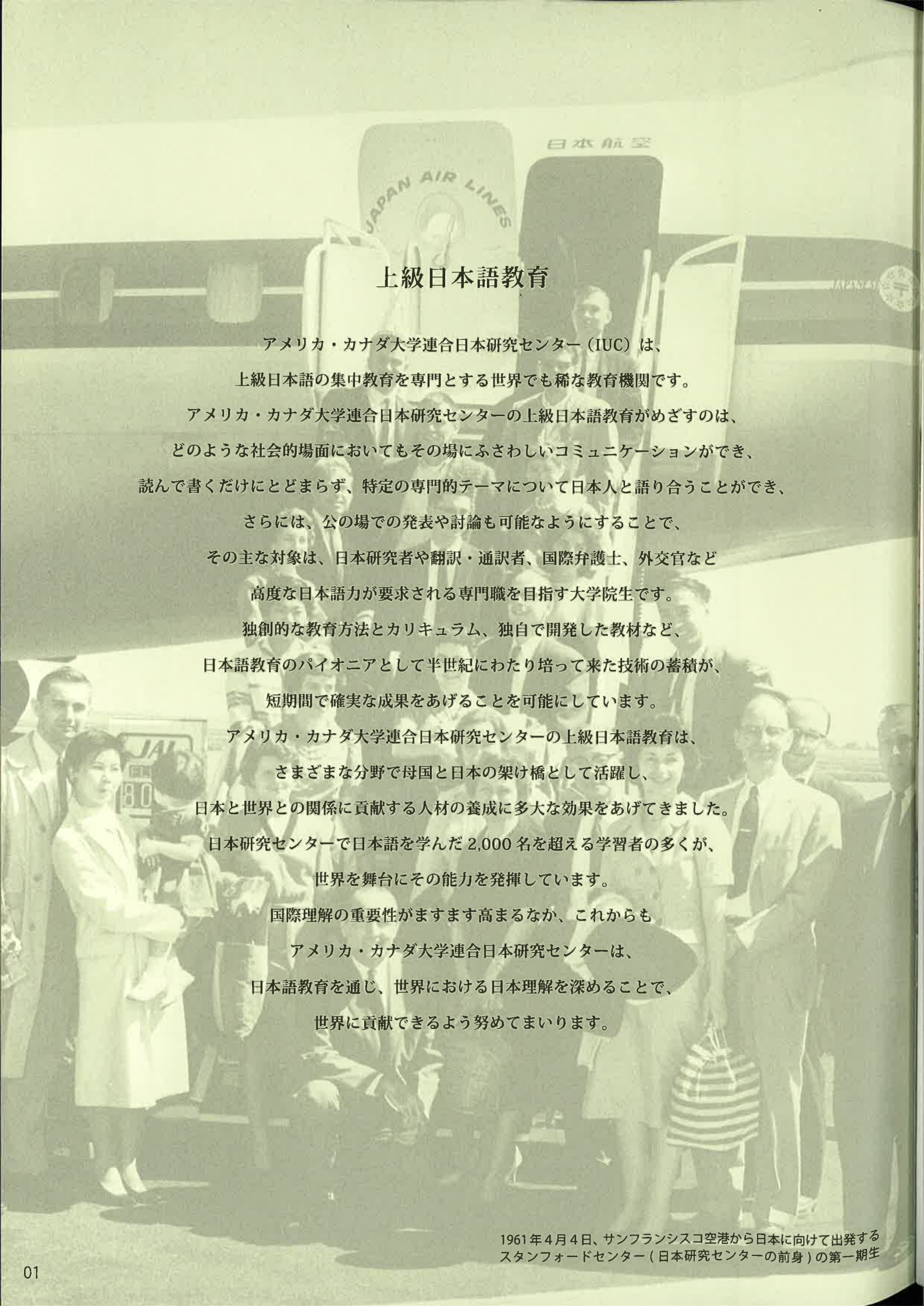
Inter-University Center for Japanese Language Studies

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

50年

1963 – 2013

50 glorious years



上級日本語教育

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）は、
上級日本語の集中教育を専門とする世界でも稀な教育機関です。
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの上級日本語教育がめざすのは、
どのような社会的場面においてもその場にふさわしいコミュニケーションができ、
読んで書くだけにとどまらず、特定の専門的テーマについて日本人と語り合うことができ、
さらには、公の場での発表や討論も可能なようにすることで、
その主な対象は、日本研究者や翻訳・通訳者、国際弁護士、外交官など
高度な日本語力が要求される専門職を目指す大学院生です。
独創的な教育方法とカリキュラム、独自で開発した教材など、
日本語教育のパイオニアとして半世紀にわたり培って来た技術の蓄積が、
短期間で確実な成果をあげることを可能にしています。
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの上級日本語教育は、
さまざまな分野で母国と日本の架け橋として活躍し、
日本と世界との関係に貢献する人材の養成に多大な効果をあげてきました。
日本研究センターで日本語を学んだ 2,000 名を超える学習者の多くが、
世界を舞台にその能力を発揮しています。
国際理解の重要性がますます高まるなか、これからも
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターは、
日本語教育を通じ、世界における日本理解を深めることで、
世界に貢献できるよう努めてまいります。

1961年4月4日、サンフランシスコ空港から日本に向けて出発する
スタンフォードセンター（日本研究センターの前身）の第一期生

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
専務理事 インドラ・リービ

Indra Levy
Executive Director
Inter-University Center for Japanese Language Studies

言葉は人々を結ぶ重要な媒体である一方、人々を隔てる壁にもなりがちです。中でも特に日本語は、勉強するものにとって乗り越えなければならない壁が高い分、努力の甲斐もより一層大きいに違いありません。

IUCはこのような思いから、今をさかのぼる半世紀前の1963年に設立されました。

IUCとは、Inter-University Center for Japanese Language Studiesの略で、日本研究を精力的に推進する北米の主要大学が協同で運営する、世界でも稀な上級日本語教育を専門とする機関です。あるいは「超上級」といった方が相応しいかもしれません。本校の使命は、レベルの高い日本語を介さずして成り立たない、深く、実り多い関係を生み出すことにあります。

本校は、日本でしかできない上級日本語教育を提供するため、スタンフォード大学の呼びかけに応じて北米の主要大学が協力し、10大学による連合を作ったことに由来します。以来、上級日本語教育を必要とする学生であれば誰もが目指す教育機関として、全米のみならず世界中から非常に優秀な学生が集まります。運営の母体を成す加盟大学も現在15校となり、学生数も初期のほぼ3倍に増えました。

半世紀にわたり、本校は2,000人以上の学生に重要な教育を行ってきました。歴代の卒業生が母国と日本との関係における様々な分野でリーダーシップを発揮していることからも窺えるように、本校独自の日本語教授法は多くの指導的な人材を育んでまいりました。一例をあげれば、ジェラルド・カーティス教授を始め8名の米国人卒業生が、日米関係への多大な貢献が認められて旭日賞を受賞しております。

創立50周年にあたって、こうした卒業生の業績を励みに、今後一層の貢献をめざしてIUCの基盤をより盤石なものにするため、50周年記念事業を展開してまいります。

言葉とは人を隔てるものでなく、結びつけるものとの思いに共感し、IUCの事業を応援してくださいます皆様に、感謝の意をお伝えすると共に、引き続きご支援をお願い申し上げます。

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
所長 ジェームズ・C・バクスター

James C. Baxter
Resident Director
Inter-University Center for Japanese Language Studies

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）創立50周年にあたり、本校の活動に関心をお寄せくださるすべての方々に感謝の意を表したいと思います。とりわけ、外国人に対する上級日本語教育の重要性に理解を示し、長年に亘って、励まし、支えてくださった日本の皆様にお礼申し上げます。

IUCという特別な機関の所長を務めることは、たいへんな名誉であり、私自身IUCを極めて高く評価しております。その教育の素晴らしさに初めて気づいたのは、45年前、大学院で日本語を学び始めた頃のことでした。IUCで学んだ同輩が何人かいて、その日本語能力の高さには大いに感心させられ、驚かされたものです。いずれも本来優秀な学生たちではありましたが、習得の要因は、IUCの厳格なプログラムと先生方に負うものだと聞かされました。大学院修了後も、多くのIUC卒業生に出会いましたが、いずれも高い日本語能力を維持し、それを駆使して活躍する姿に感銘を受けると同時に、彼らから多くを学びました。

IUCは、日本語の習得が将来のキャリアに必須とされる学習者に対し、10ヶ月間で上級レベルの技能を身につけさせ、専門分野の研究や業務が十分行えるよう訓練しており、入学条件を充たす志願者すべてに門戸を開いています。学生の出身校は米国とカナダの大学が多くを占めますが、この50年で152校を数えます。国籍も米国がほとんどではありますが、過去5年を見ると、米国とカナダに加え、イギリス、イタリア、韓国、シンガポール、中国、デンマーク、ドイツ、フランスなど、出身は様々で、IUCの教育効果が北米と日本にとどまらず世界に広がる兆しと捉えています。

そして、半世紀に及ぶ貴重な遺産を次の世代へと引継ぐ役割を担うことをたいへん誇らしく思っています。より良いコミュニケーションと日本への理解促進に役立つよう、これからも日本研究センターの維持、強化に努めてまいりますので、ご賛同とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

この度、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(IUC)が創立50周年の節目を迎えられましたことに心からお祝い申し上げます。

IUCは、1963年の創立以来、上級日本語教育を専門とする教育機関として活動し、日本と諸外国、とりわけ米国及びカナダとの架け橋として活躍する日本研究者の育成に多大なる貢献をされてきました。固い絆で結ばれた日米・日加関係は脈々と続いてきた両国の人的交流に支えられてきた結果であると言えましょう。北米における「日本通」と呼ばれる秀でた親日層の存在は、日本にとってかけがえのない財産であるとともに、そうした方々のご活躍は、世界での日本のプレゼンス向上に寄与するものです。その意味で、IUCのこれまでのご尽力に心より感謝申し上げる次第です。

北米地域では、言語そのものや歴史・文学への興味から日本語を学習する層が引き続き根強く存在しておりますが、昨今、世界中の若い世代の間で、漫画やアニメといった日本のポップカルチャーがきっかけとなり日本語に興味をもつ人たちも増え、同地域の日本語学習者数も着実に増加しています。言語は、その国の文化や歴史、価値観、国民性を理解するための重要な鍵といえましょう。その意味でも、言語を核として、日本と北米地域の関係を下支えするIUCの活動に今後も大いに注目するところであり、日本語の教育・研究機関であるIUCの役割に対する期待は、今後更に増していくと確信しております。政府としても可能な限りの応援をしていきたいと考えております。

最後に、この度半世紀を迎えられたIUCの今後の更なる御発展を心よりお祈り申し上げます。

外務大臣

岸田文雄

I offer my heartfelt congratulations to the Inter-University Center for Japanese Language Studies (IUC) on its fiftieth anniversary.

The strength of the U.S.-Japan relationship lies in our shared values, abiding trust, and deep friendship. We are close partners on the global stage, in fields ranging from security to development to space exploration. Our unique relationship is built upon a foundation of strong people-to-people ties, often formed during study in each others' countries.

Operated by a consortium of fifteen universities, including many American universities, IUC has trained over 2,000 of the most important American scholars and business leaders active in the U.S.-Japan sphere, providing them with Japanese language skills necessary to do their jobs.

For half a century, IUC has fostered the development of exceptionally talented communicators in the Japanese language and outstanding experts on Japan, including Kurt Tong, my own Deputy Chief of Mission at the U.S. Embassy in Tokyo. I expect equally outstanding contributions and successes form IUC's future graduates in the decades to come, and express my sincere appreciation to all the institutions and benefactors who support the IUC's mission.

Sincerely,

Caroline Kennedy

Caroline Kennedy

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(IUC)の設立50周年を、心からお祝い申し上げます。

日米関係の強さの要因は、共通の価値観、変わらぬ信頼、深い友情にあります。両国は国際舞台でのパートナーとして、安全保障、開発、宇宙探査などさまざまな分野で緊密に連携しています。こうした日米の特別な関係は、人と人との強い結びつきを基盤としており、このような結びつきは多くの場合、互いの国への留学を通して構築されます。

IUCは、米国の大学を含む15大学が加盟するコンソーシアムにより運営されています。日米関係の分野で最も強い影響力を持つ米国の学者や財界指導者のうち、IUC で学び、仕事に必要な日本語能力を習得した人は2,000人を超えます。

IUCは50年にわたり、日本語でのコミュニケーション能力に優れた人材や、優秀な日本専門家を育成してきました。カート・トン米国大使館首席公使もその一人です。将来のIUC卒業生たちも同様に、多大な貢献をし、大きな成功を収めることを期待するとともに、IUCの活動を支援する全ての組織や後援者に心から感謝します。

駐日米国大使

キャロライン・ケネディ

このたびは、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの創立50周年、誠におめでとうございます。世界における日本理解の促進、そして横浜の国際化に多大な御貢献をいただいております貴センターが、半世紀という大きな節目の年を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。

約150年前の開港以来、横浜市民は進取の気風をもって世界と交流し、横浜市は近代日本の世界に対する窓口として発展してきました。その国際性は、横浜の大きな魅力であり都市としての価値につながっています。

「国際都市」の価値をさらに高め、誰もが暮らしたい、活力あるまちとしての魅力を高めていくには、国際性豊かな資質をもち、世界的な問題を視野に入れ活躍できる人材の育成が必要です。

貴センターは、日本を深く理解しながら国際社会で活躍できる人材の育成に力を尽くしておられます。これまで約2,000名にものぼる卒業生の方々が、世界中をフィールドとして、外交・経済・文化など様々な分野の第一線で、「日本専門家」として、そして、日本と母国の架け橋として活躍なさっています。

こうした素晴らしい実績をお持ちの貴センターと横浜市がパートナーとして協力し合うことで、「国際人材の育成」という双方の目的を遂げ、ひいては、日本、世界への貢献につなげたいという思いから、1987年、貴センターを横浜へ誘致させていただきました。以後、20年間にわたり「横浜日本語教育フォーラム」を共催し、日本語教育の普及や国際理解の醸成に御貢献いただき、国際都市ヨコハマの推進にも、大きなお力添えをいただいております。改めて深く御礼申し上げます。

横浜市は、今後も、貴センターの活動を支援させていただくとともに、貴センターのお力添えのもと、国際性豊かなまちづくりの推進と、世界との交流・連携を一層深めてまいりたいと思っております。

貴センターのますますの御発展と卒業生の皆様の御活躍を、心より御祈念申し上げます。

横浜市長

林　文子

本年、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターが創立50周年を迎えられますことを心よりお慶び申し上げます。

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターは、50年にわたり上級日本語教育を実施され、日本と世界とをつなぐ優秀な人材を育成されてきました。現在2,000名を超える卒業生の皆様が、日本研究者として、また日本に関連する各界の実務家として世界中で活躍されていることを心からお祝い申し上げます。

国際交流基金は、日本と海外の文化交流を促進する専門機関として1972年に設立されました。文化芸術交流、海外の日本語教育支援、日本研究・知的交流の支援を事業の大きな柱として様々な事業を展開しております。
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターについては、日本語教育の拠点として、また日本研究者の人材育成という視点からも非常に重要な機関として、長年にわたって微力ながら支援を続けさせていただきました。

1982年度に同センターは、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に長年にわたり顕著な貢献があり引き続き活動が期待される個人または団体に贈られる、「国際交流基金賞奨励賞」を受賞されました。それからさらに30年余りの年月が過ぎ、創立50周年という記念すべき年を迎えられましたことを、国際交流基金としてもたいへん光栄に存じます。

最後になりますが、これまでアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターのご発展にご尽力されたご関係の皆様に心より感謝申し上げるとともに、センターの今後一層のご発展をお祈りして、ご挨拶とさせていただきます。

独立行政法人国際交流基金
理事長

安藤　裕康

1963
日本研究センター設立

1950年以降北米では日本研究が急速に盛んになる一方、研究に必要な日本語を現地で習得するのは困難なことから、日本語集中教育機関を日本につくり、学生を送って高度な日本語を習得させようと、日本研究の伝統と実績を持つアメリカとカナダの10大学が連合で「日本研究センター」を設立。

同年、国際基督教大学構内（三鷹市）に移転。

1961
スタンフォードセンター開校

日米関係が益々重要となっていく将来を見据え、高度な日本語力を駆使できる人材育成が急務と考えたスタンフォード大学が、日本研究センターの前身となる「スタンフォードセンター」を東京に設立。東大、慶大、早大、日本女子大の協力で運営された。和敬塾（文京区）に日本語研修所が置かれ、旧細川邸が事務所として使われた。

1965
『Intermediate Spoken Japanese』開発

センターが初めて開発したテキストで、学生が遭遇しうる場面での会話を中心に構成された話し言葉習得のための中級テキスト。（1970年出版）

1972
『Basic Japanese - A Review Text』開発

基本文法全般を短期間で復習するために開発された教材で、文法項目と会話とが結びつけられ「使える」文法の習得を目指す。（1975年出版）

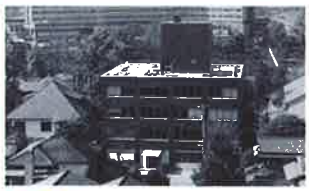
ビデオを用いた教育開始

当時開発されたばかりのビデオレコーダを導入し、ビデオ利用の日本語教育をいち早く取り入れる。

1968

「アメリカ・カナダ12大学連合日本研究センター」に改称。加盟校の増減に応じて改称するという経過を経て、1987年から「アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター」とする。

1967
千代田区紀尾井町（日本農業研究所ビル）に移転



1967
『Integrated Spoken Japanese』開発

中上級表現文型の習得を目的とした中上級テキスト。会話とモノローグが同一トピックで提示され、そこで必要とされる表現や語彙を学習。1971年にvol.1, 2が出版され、中上級日本語の代表的テキストとして人気を博す。

1973
待遇表現教育開始

1978
紀要第一号発行

1987
横浜市へ移転

東京紀尾井町の本拠が手狭になり、移転先を探していた当センターに対し、「国際文化都市づくり」を掲げる横浜市から招致の申出があり、「移転に関する協定書」に調印。桜木町駅前の港陽ビル（横浜市中区）に入居。その後、みなとみらい地区の開発に伴い、1991年にパシフィコ横浜の横浜国際協力センター5階へ移転。

ハマに来る米加の頭脳

今夏、東京から移転

1987
『An Introduction to Advanced Spoken Japanese』出版

『Basic Japanese - A Review Text』の代替として開発。基本文法の復習と口頭運用能力の向上を目標とし、特に表現の自然さに焦点をあてた。

統合的アプローチ開始

読解や聴解等、これまでそれぞれ別に行っていたコースを組み合わせ、統合することで四技能を効果的に高めるアプローチを採用。

1982
国際交流基金「国際交流奨励賞」（現国際交流基金賞）受賞

1989

横浜市・横浜市教育委員会・横浜市国際交流協会（YOKE）との共催で「横浜日本語教育フォーラム」の企画運営を開始。日本語教育をめぐる様々なテーマを取り上げ、セミナーやワークショップを実施。

日本大学法学部と学術交流に関する覚書を締結し、同法学部内に東京事務局を設置。

1989
漢字学習CAI開発

コンピュータの日本語教育への活用を目指し、その第一段階として中級漢字学習のためのソフトウェアを開発。

1995

キヤノン販売株式会社よりアップル社製コンピュータ40台を含むマルチメディア・ラーニング・システムの寄贈があり、コンピュータを利用した授業や自習が可能となった。

1994

『総合運用Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』開始

1993

漢字学習プログラム (SKIP) 開始

全常用漢字の習得を目標とするプログラムを必修教科に。1994年その教材を『KANJI IN CONTEXT』として出版。

1992

『接続表現』開発

『日本語の手紙の書き方』出版

1991

パシフィコ横浜に移転

1991

『待遇表現 (Formal Expressions for Japanese Interaction)』出版

1973年以来実施してきた待遇表現教育の集大成として出版。

2011

WebEx による e-learning の実施

東日本大震災で学生が帰国を余儀なくされたことに伴い、プログラム後半の全教育をWebEx システムを用いたe-learning によって実施。

2009

iPhone アプリ『iKIC』発売

KANJI IN CONTEXT 学習ソフトを iPhone アプリに移植した iKIC を発売。

2004

『KANJI IN CONTEXT』学習ソフトウェア開発

2000

『Integrated Japanese Advanced Course』開始

書き言葉については中上級表現や語彙を類義表現やそれらの違いも含めて学習し、話し言葉については場面や相手に合わせたスタイルの使い分けを身に着ける。2005年に最終版が完成。

1998

横浜における教育・学術交流の増進を図ることを目的に横浜市立大学と協力に関する覚書を締結。

1996

インターネットホームページ開設

1996

全必修教材のソフトウェア化

2013
創立50周年

2013

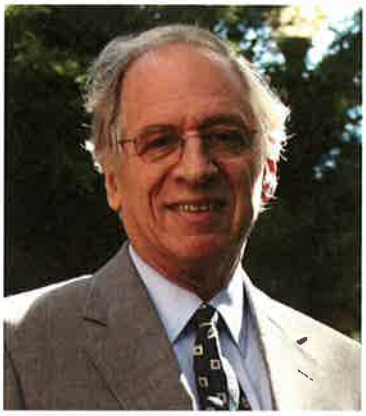
『KANJI IN CONTEXT（改訂新版）』出版

1994年に出版されて以来好評を博していた『KANJI IN CONTEXT』だが、常用漢字の改定を受けて収録漢字を増補し、更に全面的に内容を改めた『KANJI IN CONTEXT(改訂新版)』を11月に出版。

学生数の変遷

レギュラーコース（10ヶ月プログラム）
平均在籍者数

1960年代（1963〜70）20.2名
1970年代（1971〜80）30.5名
1980年代（1981〜90）33.5名
1990年代（1991〜00）43.4名
2000年代（2001〜13）45.5名



ジェラルド・カーティス
Gerald L. Curtis

コロンビア大学政治学教授
日本通の政治学者として内外のマスコミで活躍
主な著書に「代議士の誕生」「永田町政治の興亡」「政治と秋刀魚」など
2004年旭日重光章を受賞
1964―65年に日本研究センターで日本語を学ぶ

私にとっての日本研究センター

現代日本研究者としての私の人生は49年前に始まった。1964年の夏、東京に着いた私は、六本木の国際文化会館で宿泊手続きをし、翌朝早起きしてセンターを探しに出かけた。

８月の暑くじめじめしたその日の記憶は今でも鮮明だ。国際文化会館のフロント係が親切に書いてくれた行き方を頼りに四谷駅に行くと、そこから三鷹まで中央線に乗り、三鷹駅からタクシーで国際基督教大学へ向かった。当時、日本研究センターは国際基督教大学のキャンパス内にあり、小さな教室のいくつかを間借りしていたのだ。横浜にある今の立派な施設とは大違いである。

その時は思いもよらなかったが、その日センターで会った３人の先生が、私の人生に大きな影響をあたえることになった。言語課程主任の水谷修先生、その夫人の信子先生、そして高木きよ子先生である。献身的で思いやり深いが、やり遂げれば到達できる最も高いレベルの日本語を目指して、学生たちを頑張らせ、努力させることに妥協はなかった。これは時代を超えて共通するセンターの先生の特徴で、だからこそ、センターが世界で最も優れた上級日本語教育機関だと断言できるのである。

日本研究センターで私は素晴らしい日々を過ごした。高木先生が見つけてくれた西荻窪の四畳半で寝起きしながら、かつてないほど猛勉強した。毎日が初めての経験と驚くべき発見の連続であり、生涯の友となるクラスメートとも出会った。センターに入学したとき、センターのプログラムを終えたら何をしたいのか、はっきりしていなかった。しかし、10ヶ月後、アメリカへ帰国するのを前に、私に何の迷いもなかった。日本の専門家を一生の仕事にしたい、と。

日本研究センターは半世紀に亘り、顕著な業績を積み上げて来た。私が在籍した1964―65年、先生は翌日の教材準備のために夜遅くまで働いていた。学生が登校したらすぐに配ることができるよう、謄写版で一枚一枚刷っていたのだ。今、センターには素晴らしい教材や設備があって、学生たちは50年前には夢ですらありえなかったありとあらゆるテクノロジーの恩恵を受けている。センターは当時においても素晴らしい機関だったが、今はそれが更に際立ったと言えるだろう。

私が学んだ当時、学生たちのほとんどは博士課程の大学院生で学者になることを目指していた。だが、時代は変化し学生もセンターも変わった。現在センターの卒業生は、研究者はもちろん、弁護士やビジネスマン、ジャーナリスト、政府関係者などのさまざまな職業に就いている。センターは小さな学校だが、その卒業生はそれぞれの専門分野において並外れた影響力をもっている。それは、彼らが日本についての専門知識を備え、専門家として精通したレベルの日本語でコミュニケーションができるからこそである。

日本研究センターは、維持し育んで行くべき宝である。センターが創立から50周年を迎えたことを心からお祝いしたい。一方で、センターがこれからの50年にもその重要な使命を確実に遂行するために、いかなる手段を講じるべきか、単に過ぎたことを祝うにとどまらず、未来へも注目しなければなるまい。
IUC 創立 50周年おめでとう！

1967 年頃の日本研究センター
（千代田区紀尾井町）

授業風景（水谷信子先生）

ケネス・D・バトラー所長による講義

図書室兼ラウンジにて

創立50周年によせて

水谷　修

言語学者
前名古屋外国語大学学長
元アメリカ・カナダ大学連合
日本研究センター副所長

日本研究センターが創立50周年を迎えたと聞き、もう50年も経ったのかと感慨深いものがあります。この間、日本語能力をしっかりと身に着けた日本専門家の育成に、センターは見事な成果を挙げてきたと言えます。それは、世界中の日本関係の専門家の中に占めるセンター卒業生の多さを見てもよく分かります。

一方、この50年間、日本語教育をめぐる様々な状況は大きく変化しました。これまでは、弱い日本語教育を強くすることが一番の課題でした。日本語教育を充実させ、日本語学習者数を増やしていくことが目標となっていました。日本語教育は成長期だったのです。

現在では、日本語教育も成熟し、学習者数も増加しました。当初の目標を達成したと言えるかも知れません。しかし、実はこれからがむしろ難しい時期になるだろうと私は思っています。

一つには、これまでのような学習者数の一方向的な増加が見込めなくなるだろうという点です。今後の成長にあたり、単なる数的増加とは異なる新たな価値観が求められていると思います。

また、日本語は、世界における重要性を確実に増した一方、同時に言語としてのローカル性を依然として強く残している言語です。このような状況の中、私たち日本語教育関係者は、世界の中の日本語の位置づけを常に意識することが、成熟期を迎えた日本語教育において必要になっていくでしょう。

確かに難しい状況になってきたと言えると思います。しかし、間違いなく言えるのは、今後これまで以上に日本語教育の質的側面を充実させることが重要になるということです。そしてその意味で、高度な日本語力を有する外国人の育成という目的を持った日本研究センターの重要性は、これまで以上に強まると思います。大変だとは思いますが、今後の益々の発展を期待しています。

＊水谷修先生は病気療養中のため、2013年7月27日に病室でお話を伺い、それをまとめる形で掲載させていただきました。先生の一日も早いご快復をお祈り申し上げます。

日本研究センターの日本語教育

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
副所長　　青木　惣一

日本専門家養成のための中・上級専門集中教育を行ってきた過去50年を振り返り、特徴的と言える点について紹介したい。

第一は、上級日本語教育という分野を確立したことである。設立当初、上級レベルのテキストは皆無であり、まさにゼロからの出発だったという。学習意欲の極めて高い上級日本語学習者を前にして、試行錯誤で教材を作っては試すという繰り返しの中から『Integrated Spoken Japanese』といった中・上級専門のテキストが作られ、上級日本語教育が確立されていったのである。

第二は、話し言葉を重視した四技能すべての向上を目指す教育である。当時は上級教育＝読解教育といった風潮も強く、また、日本研究者になろうとする学習者は、話し言葉にまったく興味を持たない者も少なくなかった。そのような中、将来の日本専門家にとって、日本語でコミュニケーションできることが不可欠であり、また、四技能すべての学習が最も有効だとの考えに基づき、日本語運用能力におけるオールラウンダーの養成に力を入れたのである。

第三は、このような上級専門の教育を実践することで、初・中級ではそれほど注目されなかった事項の重要性が明らかになり、それらの教育をいち早く実践したことである。例えば待遇表現である。今でこそ、その重要性に異を唱える者はいないが、本校においては1970年の初めには既にその重要性が叫ばれ、その為の教材が用いられていたのである。その他、専門分野別日本語教育、古文・漢文教育、接続表現教材等、上級学習者に対象を特化した教材も次々に開発していった。

第四に、このような上級教育に、数々の新しい教育機器や教授法を積極的に導入・実践したということである。例えば、1970年代初めにビデオ機器が開発されるとすぐに導入し、聞き取り練習や対談、会話における表現、随伴行動の教育に使用した。また、コンピュータ利用においても80年代の終わりから開発がなされ、90年代半ばには全必修教材のソフトウェア化が実現する等、その取り組みは積極的であった。教授法についても、統合的アプローチ等、新しい考えを次々に取り入れ、意欲的に実践した。

そして最後になったが、以上のような教育が可能となったのは学生によるところが大きいことである。本校の学生は日本語力と専門性・将来性を兼ね備えた優秀な学生であり、かつ目的意識が明確で意欲も高い。時には厳しく本校の教育について批判をすることも珍しいことではない。このような学生に後押しされる形で、教員も努力を続け、結果として学生と教員が共に本校の教育を創りあげる形になったと言える。そして、本校で鍛えられた教員の多くが、様々な教育機関に活動の場を変え、日本語教育の牽引役になっていったことも特徴として挙げられるだろう。

以上、教員と学生が一丸となり、よりよい上級日本語教育を求めて常に積極的に新しいことに挑戦するという姿こそが日本研究センターの伝統と言える。この伝統は、今後も引き続き維持されていくと信じる。

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターは
多くのご支援とご厚意を受けて運営されています

■施設および設備の提供

横浜市

■運営／奨学金／プロジェクト助成

国際交流基金　*The Japan Foundation*
尚友倶楽部　*Shoyu Club*
東京倶楽部　*Tokyo Club*
日本財団　*The Nippon Foundation*
CWAJ　*College Women's Association of Japan*
三菱 UFJ 国際財団　*Mitsubishi UFJ Foundation*
SMBC グローバルファンデーション　*SMBC Global Foundation*
米国伊藤財団　*Ito Foundation U.S.A.*
サトウ財団　*The Sato Foundation*
スタンフォード大学国際研究センター　*Freeman-Spogli Institute for International Studies at Stanford University*
ファウラー基金　*The Hiroko Araki Fowler Scholarship Fund*
ブレイクモア財団　*The Blakemore Foundation*
ワタナベ財団　*The Toshizo Watanabe Foundation*
日米友好基金　*Japan-U.S. Friendship Commission*
国際交流基金ロサンゼルス日本文化センター　*The Japan Foundation, Los Angeles*
米日財団　*United States - Japan Foundation*
東芝国際財団　*Toshiba International Foundation*

■創立 50 周年プロジェクト基金

三菱商事株式会社
株式会社三菱東京 UFJ 銀行
三井住友海上火災保険株式会社
キッコーマン株式会社
ほくしん会
ケイト・ワイルドマン・ナカイ

■特別協力

日本航空株式会社

■個人・法人からのご寄付

（順不同　敬称略）

あらためて厚く御礼申し上げます

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
連合加盟 15 大学 (2013－14 年度)

ブリガム・ヤング大学	Brigham Young University
コロンビア大学	Columbia University
ハーバード大学	Harvard University
インディアナ大学	Indiana University
オハイオ州立大学	Ohio State University
プリンストン大学	Princeton University
スタンフォード大学	Stanford University
カリフォルニア大学バークレー校	University of California, Berkeley
カリフォルニア大学ロサンゼルス校	University of California, Los Angeles
シカゴ大学	University of Chicago
ハワイ大学マノア校	University of Hawai'i at Mānoa
イリノイ大学アーバナシャンペイン校	University of Illinois at Urbana-Champaign
ミシガン大学	University of Michigan
ワシントン大学	University of Washington
イェール大学	Yale University

日本研究センターの主要プログラムであるレギュラーコースを修了した学生数は、2013 年 6 月で 1,816 名となり、夏期短期集中プログラムのサマーコースや、全授業個人レッスンのプロフェッショナルコースの履修者を含めると、この半世紀で 2,000 名を超える学習者が日本研究センターで日本語を学びました。本校卒業後、その多くが博士号を取得して日本研究者、広義で言うところの東アジア研究者となっています。現在、レギュラーコースの卒業生の三人に一人にあたる約 600 名が、220 校以上の大学で教鞭をとっており、日本について書いた文献や著書 750 冊以上が国内外で出版されています。教育・研究分野以外でも、ビジネス、法律、政府関係、ジャーナリズム、翻訳・通訳、芸術など、幅広いジャンルにわたり、日本や米国、カナダはもちろん、英国、オーストラリアなど英語圏の他、中国を筆頭とするアジア各国、欧州、中東や南米を含め、30 を超える国と地域を活動の場としています。高度な専門性を備え、日本語と日本文化に精通した日本研究センターの卒業生は、「日本」に対するその深い造詣を次の世代へ、そして広く世界へと伝えています。

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
2013-14 年度レギュラーコースの学生たち

IUC
横浜

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
Inter-University Center for Japanese Language Studies

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい1-1-1
パシフィコ横浜 横浜国際協力センター5階

TEL: 045-223-2002
FAX: 045-223-2060
E-Mail: iuc@iucjapan.org